

文政十三年に到つて、大嶋屋傳右衛門版の開版があつた。

尙、正信偈和讃開版の圖示は、近刊の眞宗研究に付加へてあるから參考にされたい。

① 教如版は三版とその入交版がある。

② 文明本の複刻本等は本山版か否か明でない。

③ 四帖本にはこれより先に坊刊と思はれるものもあるが、刊者を明にし得ない。又、禿氏祐祥氏は、眞宗濫古圖錄第二輯に、寛文年間のもの見たる事あり、と記して居られるが、確たる事を記して居られないので、此の本の事は他日の研究にゆする。

宗祖と三善、井上兩族に就いて

寺 西 惠 然

宗祖時代に三善一族が如何に東國方面に活躍して居たかを、「東鏡」、「玉葉」、「大日本史」等を通して見ると

三善爲行	久安四年	下總介
同行衝	承安元年	能登介
爲則	治承元年	越後介
盛俊	同 三年	武藏權守
倫重	承元三年	越中大掾
同 康俊	寛喜元年	加賀守
同 盛俊	治承三年	武藏權守
同 倫康	安元二年	武藏權守

頼朝と兼實とを結ぶ介在者はこの三善氏であることは既に明かである。其の基點となつて居る人物は三善康信で出家して善

信と云つて居た。彼が幕府の問注所の執事となり加賀守となつてから突如としてこの一門が東國北國に姿を現はして來て、善光寺再建の頼朝の事業に源氏一族とこの一族とが力を合せて造營にかかつてから幕府と北越との道路が完備し、信濃源氏の北越、信濃の交流がはげしくなり三善一族との提携がしげくなつた。

その信濃源氏の一流に井上氏があつて、この一族が宗祖に歸依して佛教者となつて一門が次第に繁榮し所領があつたが爲め經濟的にその繁榮をいよいよ大ならしめた。この井上氏に出家して宗祖の門侶として「交名」に名をのこして居るのが善性の系統と西念の系統で何れも井上の一族であるが、原始眞宗教團中の重要人物で、表面に名を表さないが内面的に充實した信仰と經濟力をもつて、ある意味に於ける原始教團の中心をなし、基點となつて居た。

坂東本（教行信證）を一時所有して居たのもこの善性の系統の明性であり、大谷本廟の所謂、屋地手繼所持目錄を保管したのも飯沼善性房子息智光房とである。弘安三年十月二日日附で書かれて居る。文永九年から九年目である。この善性も西念も悲痛な人生體驗の所有者で、そのため一層深く宗祖の説かれる本願の宗教に感動したのであらう。即ち苦惱の有情の一人として宗祖の教に深く歸入したのであらう。

善性の親である井上滿盛は「東鏡」の元暦元年七月十日の記述によると、「井上太郎盛駿河國蒲原驛に於て誅せらる。是れ忠頼に同意の聞えあるに依つてなり」とある。寺傳はこの光盛を滿盛としてあるが、誅された人物であるためわざわざ滿

盛と改めたものらしい。

次に西念は如何と檢するに彼の父は井上盛長と云つて文治五年川中島に戰死して居る。八歳にして彼は父を失い、母とともに信濃水内郡駒澤に住し、後亦母を失い、終に宗祖の門に投じて西念の法名を授かり専修專念の行者となつて居る。晩年、武藏大田にうつり庵を結んで居る、宗祖門弟中最高の年長者の傳説をのこして居るが、これは傳説にあらずして事實である。百八歳の長命をもつて示寂して居る。

思ふに、三善一族は地方の文化方面に、井上一族は精神方面、即ち信仰方面に光を放つて居る。

宗祖に於ける廻向思想の展開

永田敬信

廻向思想が佛教の中心課題であることは、今更云うまでもない。淨土眞宗といえども二種の廻向のほかには存在し得ないのである。

然るに宗祖にあつては廻向は如來本願力の廻向であつた。そのことを端的に示すものが、信巻に於ける第十八願成就の文の扱いである。そこでは至心廻向の文を「至心に廻向せしめたまへり」と訓じている。このことに就いては淨土系諸流に多く異義のあるところである。併し宗祖が敢てこのように讀まれるのにはそれだけの根據があり、それは云うまでもなく論・論註の指示に基づくものである。

今は詳説する暇はないが、要をとつて云うならば、論註では

五念門をその行の性格に依つて二種に分ち、その一つを彼土行と判じ、彼土行としての五念門成就を、因願の十八・十一・十二の三願に依つて、その速得を的證している。このことは五念門の成就こそ佛の本願であることを示すものである。而してこれは如來の本願が五念門をその本質としていることを現わし、行者の此土に於ける行の成就こそその本願であることを顯わすことになるであらう。されば二門偈には五念門を詳述されて後、「無碍光佛因地の時斯の弘誓を發し、此の願を建てたまひき」と云い、また「願力成就を五念門と名づく」と説かれるのである。ここに如來より衆生への用きが生れる。この用きこそ廻向といわるべきものである。何故なれば、本願の本質である。五念門に於て他に對する用きを廻向と名づけられているからである。ここに於て宗祖の願成就の文に對する了解が生じたのである。

ところで、ここに一つの疑問の残ることを無視することが出来ない。それは至心廻向としての内容をもつのであれば、何故に始めより、その法を顯現しないのであらうかという疑問である。しかし本願に於て行者の自力廻向の如き表現をとるところに、むしろ本願の深き思惟を憶わねばならない。ややもすればこうした面が眞宗教學に於て等閑視されるきらいがあるのではあるまいか。宗祖は本願の文に他力廻向の意味のあることを示されるのであつて、文自體を書き換えられたのではない。成就の文自體が「至心に廻向す」であることに變りはない。

翻つて願成就の文に至心廻向といわれることの意味を勘按して見よう。思うに「至心に廻向せしめたまえる」如來の大悲は